

禪と衣食住(2)

頭

陀

袋

(駒沢女子短期大学学監 教授) 東 隆 真

頭陀袋

ござんじですか。

お坊さんが、ものを入れるために、首から掛けてい

る袋のことです。

頭陀というのは、サンスクリット(古代インド語)

のドウータ。

音訳して、杜多、沙汰、斗敷などの漢字を当てます。

意味は、我欲を除き、あるいは棄て、あるいは碎いてしまうことです。

そこで、お釈迦さまの時代から、仏教の修行僧が、衣、食、住において、できるだけ禁欲的な生活をおく

る」とを「頭陀行」というようになりました。  
「頭陀十八物」ということばがあります。

仏教の修行僧が、頭陀行を行うために必要な十八種の道具です。いわば、僧侶の必需品です。

お袈裟。食器。水を漉す囊。楊枝。洗粉。水瓶。錫  
枚。手巾。小刀。ピンセット。火をつける道具。香炉。  
香匣。坐具。繩床。經典。律典。仏。菩薩の像など。  
この十八物のなかには、日本仏教になると、「水を  
漉す囊」(川で水を飲むとき、あやまつて虫などを捕  
らえて殺生しないように配慮した袋)などは使わなく

なりますが、お袈裟、食器をはじめ、いまだに用いら  
れているものは、たくさんあります。

また、「十二頭陀行」ということばがあります。

これは、仏教の修行僧が、我欲を捨てるために行う  
頭陀行を、衣、食、住のなかで十二種類に分けたもの  
です。

一、 静かなところで修行する。

二、 つねに食べものを乞うて生活する。

三、 食べものは、貧富の区別なく一律に乞うてま  
わる。

四、 食事は、一日に午前中に一回摂る。

五、 節度のある食事をする。決して食べ過ぎない。

六、 午前中一回の食事のはかに、なにも食べない。

七、 棄てられた汚い檻樓<sup>ぼろ</sup>を拾つて洗い、これを縫

いあわせてお袈裟とする。

八、 お袈裟のほかは身につけない。

九、 墓地のそばに住む。

十、 樹の下に住む。

十一、 野外に住む。

十二、 つねに坐禪する。横臥しない。

なかなかきびしい生活です。このうち、「二、 つね  
に食べものを乞うて生活する」、「三、 食べものは、  
貧富の区別なく一律に乞うてまわる」というのが、い  
まの頭陀袋と関連があります。

いまだも、禅宗では、表面に「大本山總持寺僧堂」  
とか「善光寺」とかしまして頭陀袋を胸のまえに掛け  
て、「托鉢」をいたします。

托鉢は、要するに、食べものを乞うてまわることで  
す。「乞食」といいます。

托鉢、乞食のときには、頭陀袋はどうしても必要に  
なつてまいります。いただいたものを入れなければな  
らないからです。

私も小僧時代には、師匠と二人で、ずいぶん托鉢を  
してあるきました。

学生時代にも、東京の世田谷、渋谷、銀座、浅草、  
上野など、あちこちの門口に立ちました。

絡子の下に頭陀袋をかけます。托鉢、乞食のことを、  
頭陀行ともいいます。

この頭陀行の僧は、一見して、「乞食坊主」です。  
なるほど、乞食坊主にはちがいないかも知れません  
が、もともと仏教僧侶の食べものは、乞食によつてい  
ただくのが正しいあり方です。

それにしても、托鉢の修行は、なかなか辛いもので  
す。

一軒一軒の門口に立つて読經していますと、ひとの  
こちらの赤裸々なすがたに接することができて、けつ  
こう楽しいのですが、それだけに、きびしい思いに直  
面させられることがしばしあるものです。



しかし、托鉢の経験をもたない禪宗坊主などは信用できないというのが、私の持論です。

(読者のみなさん)

街かどで、托鉢の僧を見かけたら、どうか、お志を供養してあげて下さい!)

むかしから、お釈迦さまを「應供」ともおよびしま

す。  
羅漢さん(修行僧)のこと、「應供」といいます。

應供というのは、供(食べものをいただく)に応ずる者(資格のある者)という意味です。

自分は、供に応ずる資格があるかないか。つねにこのことを念頭におきながら生きていゆくのが仏教僧侶の本分というべきでしょう。

このきびしい自覚と反省をもたずに、檀信徒のお布施をむさばっているとすれば、それは、ただの乞食です。生活不能者です。

(こう書きながら、私自身、私のことばにおもわず、おそれおののいています)

ところで、頭陀袋は、僧侶がお袈裟を入れるときに使います。

また、地方によつては、死者を葬る場合に、首にかけてやります。

また、三十三回忌を「頭陀冨忌」ともいいます。

頭陀といえば、杜多(すだ)という姓の人もいらつしやいます。

さて、まだ、十年ばかりまえ、世界の各地にヒツピ一の若者たちが群れていたとき、彼等は、頭陀袋をもつっていました。私は、オランダで見たことがあります。

このごろでも、原宿などで、頭陀袋に似たバックを肩にかけて歩いているギャルを見かけることがあります。

なんでも無難作に放りこめるから、きっと便利なのがでしょう。

(駒沢女子短期大学学監、教授)